ISSN 2185-341X

紀要

■設立40周年記念号

【小特集】東近江市相谷熊原遺跡をめぐって－縄文時代草創期の遺構と遺物
「矢柄研磨器」雑考 －相谷熊原遺跡を理解するために－ ……松室 孝樹（１）
鈴鹿山中の遺跡にみる選地の原理 －相谷熊原遺跡の理解に向けて－ …重田 勉（９）
土偶の機能・用途に関する理解の移ろい ……瀬口 眞司（15）
＊ ＊ ＊
高島市今津町弘川Ｂ遺跡出土の縄文土器（２）……小島 孝修（28）
草津市志那湖底遺跡出土岩田第４類土器群の様相 ……小竹森直子（42）
近江・湖東北部の埴輪 ……辻川 哲朗（48）
製鉄炉の設置方法について －源内峠遺跡１号製鉄炉の検討－……大道 和人（73）
古代建築物構造ノート －掘立柱の再考－ ……横田 洋三（81）
塩津起請文札と勧請された神仏……濱 修（86）
三重県桑名市西方廃寺出土の飛雲文軒瓦について
－桑名市博物館所蔵品より－……中西 常雄（92）
観音正寺と観音寺城跡（２） ……伊庭 功（95）
遺跡出土の化粧道具に関する覚書 －夏見城遺跡出土の毛抜きから－ …堀 真人（103）
将棋史研究ノート（５） 金将の役割 －金将の動きと配置から－ …三宅 弘（116）
「忍者」研究の現状と課題 ……阿刀 弘史（120）
文化遺産としての琵琶湖
－「水」を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群－……大沼 芳幸（124）
平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習を終えて…具志堅有紀（142）
保存処理30年の記録……中川 正人（148）

24

財団法人滋賀県文化財保護協会 2011.3

紀　　要

第　24　号

－設立40周年記念号－

２０１１．３

財団法人滋賀県文化財保護協会

草津市志那湖底遺跡出土の岩田第４類土器群の様相

小竹森　直　子

１．はじめに

志那湖底遺跡は、弥生時代の石剣や銅鐸の出土をはじめとする数多くの遺物が採取されており、江戸時代から知られていた湖底遺跡の一つである。また、昭和60年代に実施された発掘調査については概要報告書が刊行されており、縄文時代晩期の土器型式・編年研究に取り上げられてもいることから、縄文時代の遺跡としても知られ、その本報告が待たれていた。

平成22年度末にようやくその本報告がまとまり刊行の運びとなり、調査成果の全容を提示することができた（小竹森他2011）。特に、縄文時代後期末～晩期前葉の土器資料は、当該期の標識遺跡となっている大津市滋賀里遺跡やこれに隣接する穴太遺跡の資料に匹敵する良好なものである。その中で注目されるのは、近畿地方の土器群に影響を与えたとされる、山口県岩田遺跡の資料を標識として、主として瀬戸内地方に分布する岩田第４類土器群である。筆者は縄文土器の研究者ではないため、報告書においては岩田式系土器としてその存在の明示に努めるに留まった。

そこで、この本文においては滋賀里式土器群と岩田第４類土器群との関連性を探る視点から志那湖底遺跡の当該期土器群を再見し、整理調査担当者として積み残した責任の一端を果たしたいと思うものである。

２．遺跡の概要（図１）

志那湖底遺跡は、琵琶湖南部の南湖東岸にひろがる湖底遺跡の一つである。南湖東岸の縄文時代の湖底・湖岸遺跡としては、守山市赤野井湾遺跡（早期～前期）、草津市烏丸崎遺跡（晩期末）、同津田江湖底遺跡（前期・後期～晩期前半）の発掘調査成果が報告されており、志那湖底遺跡は津田江湖底遺跡の南に位置する。これらの湖底遺跡は、かつては陸化していた湖底段丘上に立地している。

琵琶湖開発事業に伴い実施された潜水試掘調査の結果から、葉山川河口北側の湖岸沿いに南北約数百ｍ、沖側に東西約400ｍの範囲に主として縄文時代～弥生時代の良好な遺物包含層が拡がっていることが判明し、その一部について発掘調査が実施された。縄文時代の遺構としては、1984（昭和59）年度に発掘調査が実施された志那南地区Ｔ１は、水深約３ｍの沖合約250ｍに設定された調査区であり、縄文時代後期末～晩期初頭の土器棺墓を含む土器埋納土坑が３基検出された。また、1986（昭和61）年度に実施された湖岸沿いの志那南地区Ｔ２の調査では、浜堤上から斜面にかけて所在する縄文時代後期末～晩期前葉の土器棺墓群とこれに起因する土器群、さらにその直上に良好な遺物包含層を検出した。

これらの土器類は、型式的には滋賀里Ⅰ式・Ⅱ式を主体

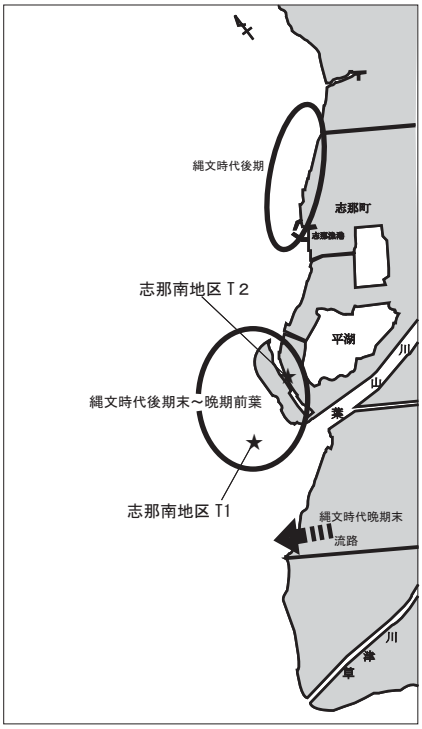


図１　遺跡位置図および志那湖底遺跡遺構分布概略図

として滋賀里Ⅲａ式～篠原式古・中段階を含み、その前後の型式は伴わない資料である。特に、Ｔ１の資料は土坑内の一括資料であり、他の時期の遺構および遺物包含層を伴わない点が最大の特徴である。Ｔ２の資料は、Ｔ１に比して供伴性は低くなるものの、より多くの形態が存在しその変遷の傾向を辿ることができる。また、いずれの資料も、滋賀里式を主体としてこれとほぼ並行する瀬戸内地方の主たる型式である岩田第４類土器群とその影響が認められる土器群、さらに東北を主とする東日本に広く分布する瘤付土器群が含まれていることから、その関係性を見る上では良好な資料群であると言える。

３．資料の提示（図２）

ここでは、志那湖底遺跡における岩田第４類土器群を型式学的視点から確認し、滋賀里式土器群やその他の型式との関係を整理する。

（１）滋賀里Ⅰ式・Ⅱ式段階の土器①：志那Ⅰ類

口縁部が内傾あるいは二段に屈曲しその外面に太い沈線文が巡る滋賀里式土器群深鉢の中にあって、頸部が緩やかに外湾してのび、短く屈曲する口縁部内外面に段を持つ岩田第４群土器の深鉢は特異であり、志那南地区Ｔ２の土器群の中の２点（図２－１・２）、遺物包含層の１点（同－３）は、口縁部だけでなく体部まで残るものである。

３点は、形態・調整手法・文様においてほぼ共通する特徴を有している。まず、低い波状口縁となり、口縁部内面には明瞭な段を有し、これにほぼ対応する外面にもわずかな屈曲を伴う内面と比較すると緩やかな段を持っていることからより口縁部が顕在化している。緩やかに外湾する頸部はナデにより平滑に仕上げ、最下位の肩部に断面が逆Ｌ字形を呈する太い沈線文を施し体部との境目とする。２～３条の沈線で構成される文様は、１では３条の沈線の始点・終点をやや間隔をあけて波頂部延長上にそろえ、その端部を意識的に跳ね上げている。これに対して２では、２条の沈線をループ状にし、向かい合うループ部が波頂部延長上に位置する。また、３の波頂部延長上には、３条の沈線文の間に押圧文が加えられており、いくつかのバリエーションが見られる。体部は丸みを帯びており、最大径部は肩部施文帯よりも下位にある。体部外面は、巻き貝によるミガキ状の条痕調整で仕上げられている。全体的にこれらの岩田第４類土器群の深鉢は、砲弾形あるいはバケツ形を呈する滋賀里式土器群の深鉢と比較すると、くの字状口縁の甕に近い印象を受ける。口縁部の屈曲が弱く口縁部外面に沈線文が見られないことなどから、１～３は岩田第４類土器群のⅡ段階に相当すると考えられる。

１は土器群として取り上げてはいるが、この１個体分からなる土器群、２は滋賀里Ⅰ式とⅢ式の深鉢の小片とで構成される土器群、３は滋賀里Ⅰ式・Ⅱ式を主体とする遺物包含層からの出土であり、明確な供伴関係を押さえることはできないものの、型式学的には志那湖底遺跡における岩田第４類土器群の出現期にあたるものとして位置付けることができよう。また、砂粒を多量に含むやや粗い胎土や、滋賀里式土器群に比べてやや締まりの弱い厚めの器壁などの特徴がある。滋賀里式土器群と比較して肉眼であるいは手触りでやや粗めとなる胎土の特徴は、以下においてもほぼ共通しており、搬入品である否かについては即断することはできない。

（２）滋賀里Ⅰ式・Ⅱ式段階の土器②：志那Ⅱ類

沖合の調査区である志那南地区Ｔ１のＳＫ１からは２点の岩田第４類土器群の深鉢が２点出土している（図２－４・５）。ＳＫ１は、南北1.8m×東西1.2mを測る平面卵形の土坑である。残存する深さは36㎝であり、埋土上半から９個体分の深鉢の破片が出土している。比較的大型の破片からなるものが６個体分あり、いずれも底部周辺は欠損している。出土状況の詳細は報告書に譲るが、明確な土器棺墓としての使用状況は認められず、複数個体を南北に立位で並べて埋設したものであると評価したものである。なお、隣接して合わせ口の状態を確認した土器棺墓とその可能性が高い土坑が１基ずつある。

４・５は２点共に低く小さいながらも外面に押圧文を施した波状口縁となっており、１～３と比較すると内面の段は甘くなり、５では断面ＶあるいはＵ字形の沈線に近くなっている。また外面では、頸部と口縁部とを明瞭に分ける段や屈曲は見られない。４では肩部に凹線状の幅の広い沈線が１条施され、波頂部延長上に押圧文が加えられているが、５では肩部の施文はない。体部は丸みを帯びた形状ではあるが、最大径部が頸部直下の高い位置にあることから、１～３に比べると体部が細長く見える。２点共に口縁端部から内面はナデによって平滑に仕上げられているが、外面の調整は大きく異なる。４は一部条痕が見られるものの肩部沈線文より上位の頸部はナデにより平滑に仕上げ、肩部以下は巻き貝による条痕調整で仕上げている。一方５では、二枚貝による条痕調整を口縁部・頸部・体部上位は横方向、体部下位は斜方向に施し、口縁部と頸部の境は意識されていない。この２点を比較すると、４は口縁部外面の段の消滅・肩部施文の帯の縮小化が顕著ながらも、頸部と体部との区分が明瞭であり、かつ巻き貝による条痕調整を行う点において岩田第４類土器群Ⅱ期の要素を多く残している。一方５は、二枚貝による条痕調整が主体となる岩田第４類土器群Ⅲ期の特徴を持ち、かつナデ仕上げによる頸部の顕在化が見られないことから、より新しい要素を持つものであると言える。したがって、この２点は型式学的には４→５となる。

では、土坑内に埋設された他の土器類を見てみると、すべていわゆる滋賀里式土器群の深鉢である。２段屈曲の下

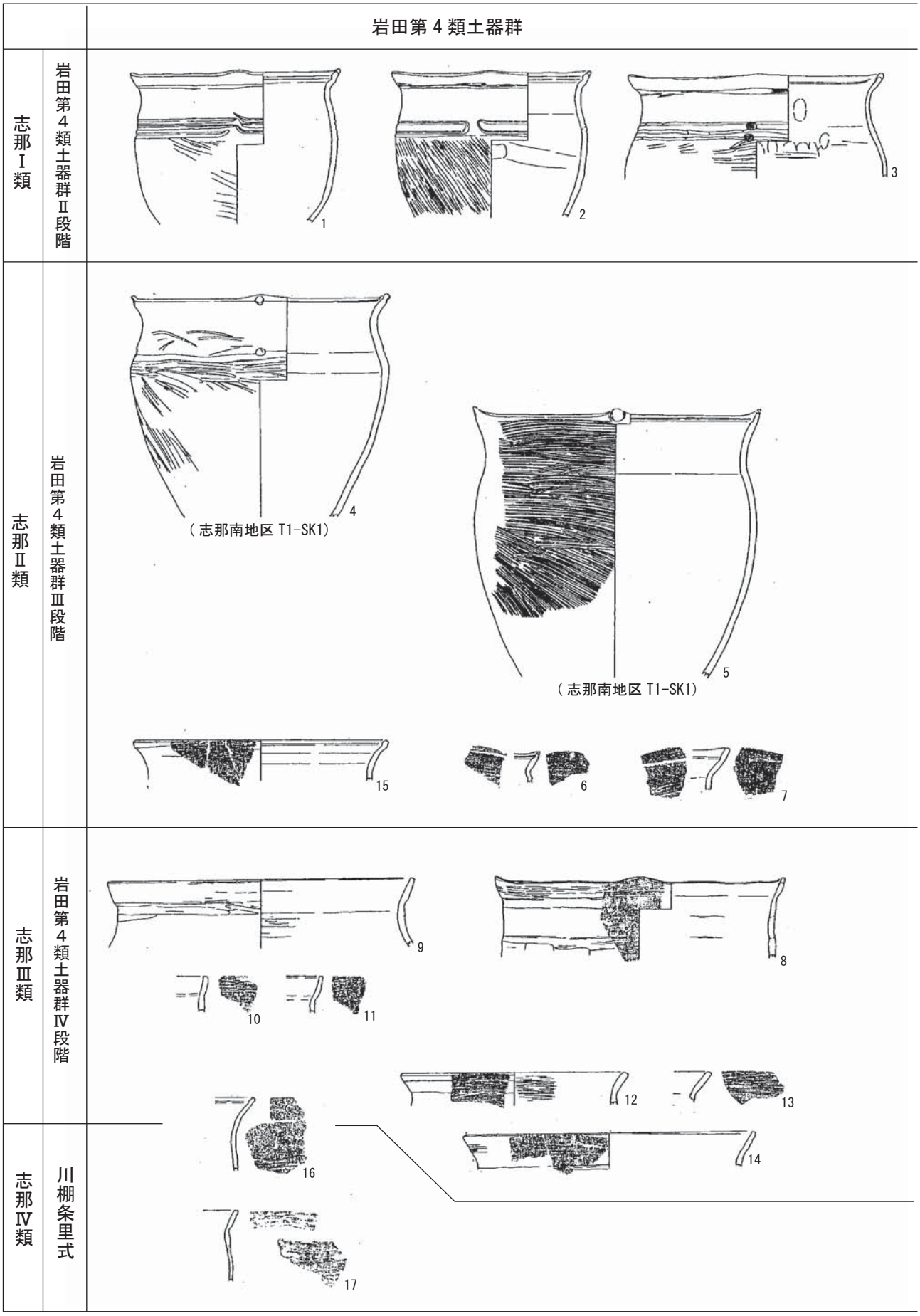
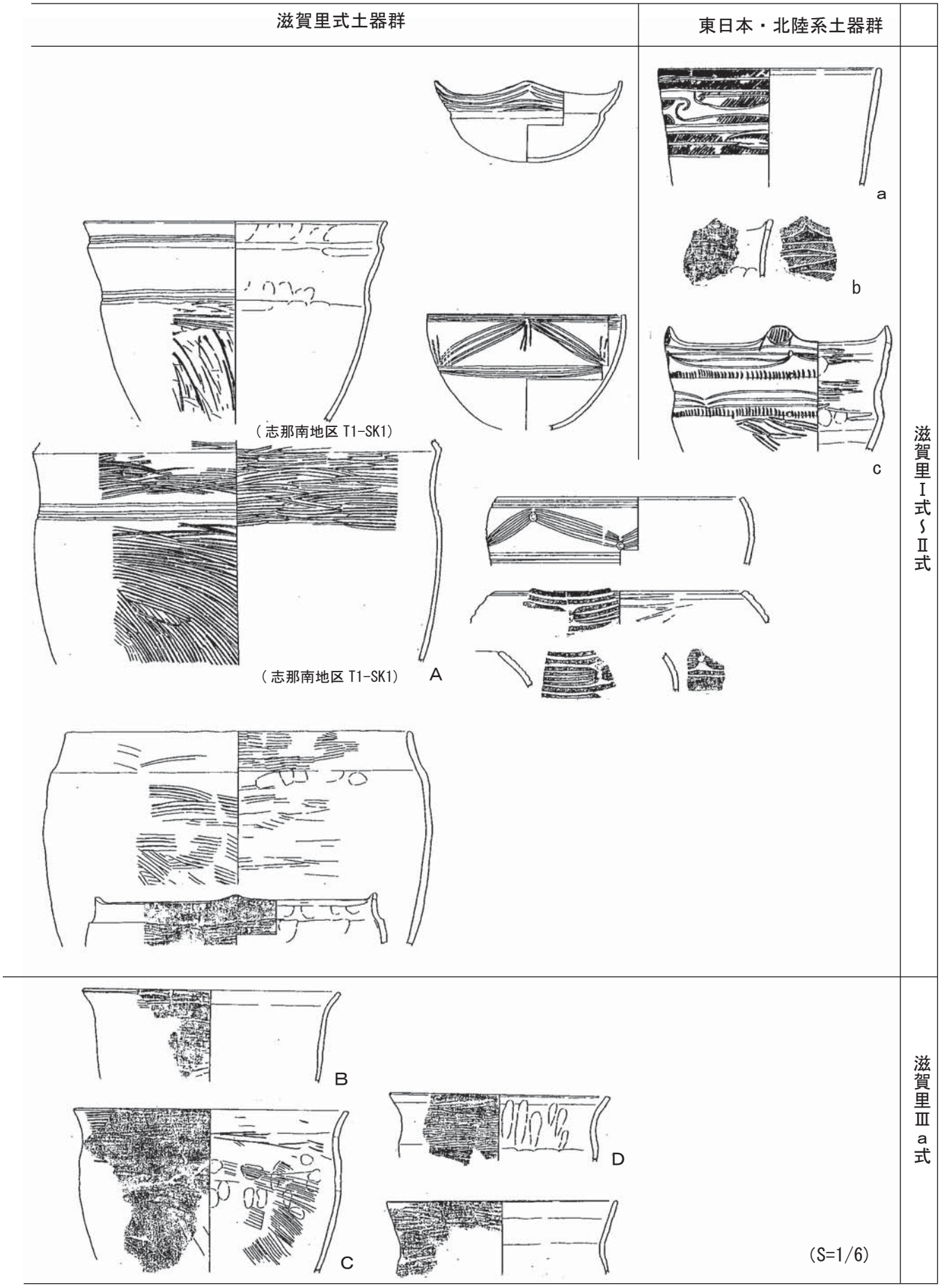


図２　志那湖底遺跡出土岩田第４類土器群とその他の土器群


滋賀里式土器群
東日本・北陸系土器群
a
b
c
（志那南地区 T1-SK1）
（志那南地区 T1-SK1）
A
B
C
D
(S=1/6)
滋賀里Ⅰ式～Ⅱ式
滋賀里Ⅲａ式

位の方が丸みを持ち、頸部から口縁部が全体的に直立気味になる傾向が見られる。口縁端部は面を持たせ気味におさめ、沈線文は太いものと細めのものの２種類がある。これらの特徴から、滋賀里Ⅰ式からⅡ式に絞りことができる。体部外面は、Ａを除き当該期の滋賀里式土器群では通有に巻き貝による条痕調整である。Ａは二枚貝による条痕調整を、体部上位から口縁部外面と頸部内面に横方向、体部下位に斜方向に施しており、当該期の滋賀里式土器としては特異な存在である。この他にも志那湖底遺跡では、当該期の滋賀里式土器群に施す条痕調整に巻き貝とは異なる、あるいは二枚貝の可能性が高いものが若干ながらも存在することは注目される。

滋賀里Ⅰ式・Ⅱ式を主体とする遺物包含層から出土した内面に段を持つ波状口縁の資料の中には、頸部が短いくの字状口縁のものが見られる（図２－６・７）。波頂部外面には押圧文が加えられていることから、この一群も岩田第４類土器群と見てよかろう。

（３）滋賀里Ⅱ式・Ⅲａ式段階の土器：志那Ⅲ類

この段階の滋賀里式土器群は、特徴が大きく異なることからその峻別が型式学的には比較的し易いが、志那湖底遺跡における出土状況からは明確にし難いため、あえて一括りとする。

滋賀里Ⅱ式の比率が高いものの滋賀里Ⅲａ式を含む遺物包含層には、頸部との境が明瞭な口縁部外面が肥厚する一群が見られる（８～15）。８は、締まりの弱いほぼ直立する頸部から口縁部をわずかに外方へひろげ波状口縁となる。口縁部外面の肥厚帯は幅約２㎝あり、内面の段はない。肥厚帯外面には横方向の条痕調整が残るが、その直下から頸部はナデにより平滑に仕上げる。９は頸部が外湾し、口縁部外面の肥厚帯の幅は約２㎝である。口縁部・頸部共にナデ調整で平滑に仕上げている。10・11は口縁部がやや内湾し、外面の肥厚帯には横方向の条痕調整を施す。12～14は、頸部が短く外湾し、くの字状になる可能性もあるが、口縁部内面の段はなく、外面の肥厚帯に横方向の条痕調整が残り頸部をナデ調整する。15は、外湾する頸部が長く、口縁部外面の肥厚帯は不明瞭ながらも口縁部内面に幅の狭い段を残す。内外面共に、ナデ調整により平滑に仕上げる。

岩田第４類土器群Ⅲ期の特徴を明瞭にとどめる15を除くと、志那Ⅱ類とした４・５と12～14との間には飛躍があるとも見えるが、むしろ志那Ⅰ類の口縁部の顕在化の系譜は明確に引いていると言えよう。土器の出土状況からは明確にすることはできないが、次にあげる一群の先駆形態でもあることから、岩田第４土器類Ⅳ段階に相当し、おおむね滋賀里Ⅱ式に並行すると考えてよかろう。

（４）滋賀里Ⅲａ式～篠原式古・中段階の土器：志那Ⅳ類

滋賀里Ⅲａ式～篠原式古・中段階を主体とする土器群・遺物包含層の土器類には、口縁部外面の条痕調整を残す肥厚帯と頸部ナデ調整の系譜を引いた一群（16・17）が見られる。当該期においては、滋賀里式土器群においてもＢ・Ｃのようなくの字状口縁が存在するが、17で顕著に見られるように口縁部直下の幅が指１本分の強い横方向ナデとこれにより実際の肥厚はほとんどないものの肥厚帯と同様の効果を持つ口縁部の特徴から二者の峻別は可能である。この特徴は、瀬戸内地方では岩田第器４土類Ⅳ期に続く川棚条里式に見られるものと共通している。

４．志那湖底遺跡における岩田第４類土器群の在り方

前章で整理したように、志那湖底遺跡では岩田第４類土器群のⅡ期からⅣ期とこれに継続する川棚条里式までの各段階の土器が存在していることは明らかであり、ほぼこれに対応して志那Ⅰ類からⅣ類へと型式学的にも時間的にも変遷したことがうかがえる。では、次に直接的な根拠は少ないながらも、志那湖底遺跡において岩田第４類土器群がどのような意味を持っていたかという視点から考えてみよう。

志那湖底遺跡における発掘調査は、限られた僅かの地点においてのみ実施されたものであり、その全容と実態は未だに不明瞭ではあるが、限られた資料ではあるものの縄文時代後期後葉の凹線文系土器群の典型的なものは極めて稀少であることから、墓域を含む集落を少なくとも志那南地区に展開したのは滋賀里Ⅰ式以降である蓋然性は高いと言える。今回の資料では、滋賀里Ⅰ式に併行する岩田第４類土器群Ⅰ期のものは存在しないながらも、集落が定着した滋賀里Ⅰ式からⅡ式への移行期での岩田第４類土器群との接触を裏付けるのが志那Ⅰ類である。煮沸具として使い込んだ形跡は認められず、土器棺としての明確な痕跡もないが、残りの良い３点を見ると文様に多様性があるものの形態・手法および文様原理に対する共通性は極めて高く、セットでの持ち込みを含み、極めて短期間にもたらされた可能性が高いと考えられる。この出現期における志那Ⅰ類は、あくまでの客体的な存在であり、滋賀里式土器群に影響を与えたとは考えにくい。

次に滋賀里Ⅱ式段階の志那Ⅱ類についても、搬入を含む客体的な存在であることに変化はないと考えられる。志那南地区Ｔ１－ＳＫ１の事例をあげたように、時期差が想定される２個体が１つの土坑に埋設されていることから、長く使用していた可能性が考えられる。このことが岩田第４類土器群の土器を特別視していたか否かは別として、志那Ⅰ類段階での単発的な接触ではなかったことがうかがえる。また、二枚貝による条痕調整を持つ滋賀里Ⅱ式の土器が伴う点は、極めて飛躍すれば単なるモノの受け入れではなく、土器作りに関する手法・技法の在地土器群への導入を示すものであり、その意味合いは前段階とは大きく異なる。

続く志那Ⅲ・Ⅳ類の段階では、遺物包含層からの出土が

大半であり、小片であるが、明らかに他の深鉢と同様に煮沸具として使用されている。また、比率は極めて低いものの一定量を占めていると想定されることから、集落内で通有の道具として使用されていたと考えられる。これらが、搬入品なのか、あるいは在地の滋賀里式土器群の製作者とは異なる手によるものなのかは明確にできないが、８やＤのような折衷形あるいは典型例から大きく崩れたバランスのものが存在することから、また、滋賀里式土器群の変化とも連動していることから、直接的なモノの導入よりも間接的接触・導入あるいは在地化の現象と捉えることができる。

以上は、かなり詳細を省いた直裁的な見方ではある。なぜなら、その接触の契機と導入の実態を棚上げているからである。土器に見る継続的な関係性は、単なるこの時代の文化や人・モノの流れの結果なのか。この点については、是非とも縄文土器研究の専門家にお願いするところである。

５．その他の土器型式との関係

志那湖底遺跡では、瀬戸内地方の岩田第４類土器群の他にも他地域の型式に分類される土器類が存在する。その中の代表的なものが、東北地方を中心として東日本に広く分布する瘤付土器群である。滋賀里遺跡などにおいても大洞Ｂ・Ｃ式の存在が知られているところであり、志那湖底遺跡では、大洞Ｂ１・Ｂ２式に並行する瘤付土器第Ⅳ式段階のバケツ形の深鉢と注口土器が滋賀里Ⅰ式・Ⅱ式を中心時期とする遺物包含層から主として出土している（ａ・ｂ）。志那湖底遺跡では、これに続く大洞ＢＣ式・Ａ式が今回の資料では認められないことから、時期的にはかなり限定的であると言える。さらに、瘤付土器類については明らかに搬入品であり、特定の器種・器形を持ち込んでいる可能性が高い。

北陸地方のものとしては、縄文時代晩期前葉の八日市新保式あるいは御経塚式に近似するもの（ｃ）が見られる程度である。また、東海地方に分布する半裁竹管文系土器に近似する鉢なども若干認められるが、岩田第４類土器群のような継続性は認められない。

滋賀里式と共に西日本研磨土器群の中に位置付けられる岩田第４類土器群と全く異なる東日本の土器群とを同列に扱うことはできない。前者は、大きく共通する土器様式の中における自然な流れであるのに対して、後者は積極的に求めた可能性が高いのではないだろうか。

いずれにしても、琵琶湖のほとりに瀬戸内と北日本の土器が出会ったことには確かであり、志那の人々がそのことをどのように理解していたのかを知りたいところである。

６．最後に

本文では、他の県内遺跡での状況や近年の諸氏の研究には触れずに、あくまでも志那湖底遺跡の岩田第４類土器群の様相に絞って述べてきた。また、報告書での記述も含めて数々の誤認があることは十二分に承知しているところである。一方で、その分布域の東端にあたる志那湖底遺跡における縄文時代後期末～晩期前葉の土器群が持つ潜在的な重要性についても認識しているところである。したがって、志那湖底遺跡における岩田第４類土器群を顕在化させることによって、その資料評価を広く求めるところである。

最後になりましたが、門外漢の筆者のとんでもない質問に対して真摯にかつ笑顔で御教示いただいた関西縄文文化研究会の増子康眞氏・岡田憲一氏・千葉豊氏をはじめとする資料見学に参加いただいた会員の皆様、そして同僚でもある中村健二氏の各氏には、深く感謝いたします。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

【志那湖底遺跡】

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1987）『志那湖底遺跡発掘調査概要－志那南その２工区－』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2011）『七条浦遺跡・志那湖底遺跡』（琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書10）

【その他】

小南裕一（2000）「岩田第４類土器小考」『山口考古』20号、山口考古学会

小南裕一（2007）「西部瀬戸内の縄文晩期土器」『第18回中四国縄文後晩期の西部瀬戸内地方』中四国縄文研究会

小南裕一・藤　有紀（2006）「川棚条里遺跡出土の縄文後・晩期土器」『山口考古』26号、山口考古学会

潮見　浩（1960）「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文化学部紀要』18号、広島大学文学部

田辺昭三・加藤修編（1973）『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会

中村　豊（2008）「西日本研磨土器（滋賀里１～３式土器）」、小林達雄編『総覧縄文土器』アム・プロモーション

挿図典拠

図１・２　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2011に拠る。

（こたけもり　なおこ：調査整理課　主任）

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した３本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていきたい。

その他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第４類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南市夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市観音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなってきていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるように伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いするしだいである。

編集担当（Ｔ－Ｔ）

紀　要　第24号　―設立40周年記念号―

刊行年月日：平成23年（2011年）３月31日

編集・発行：**財団法人滋賀県文化財保護協会**

520－2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町1732－２

（tel）077－548－9780　（fax）077－543－1525　（e-mail）mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.24 2011.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage